

新たな人材と活躍の場を求めて
高橋邦彦 (国立保健医療科学院)

本シリーズ開始時にも書かれているように「普段の研究や教育などとおして計量生物学への抱負や想いなど」ということで、今回この原稿を書く機会をいただきました。いざ書き始めるにあたって、本シリーズタイトルにある「未来」とはいつだろう？との疑問が頭の中で浮かんできました。私自身にとっては数ヶ月先や1年先も未来だと思いますし、一方で我々が見ることができないであろう100年先の未来もあります。もちろん「短期目標」「中長期的展望」などの言葉もあり、場面に応じて考えるべきことではありますが、いったい私自身のこれまでの「普段の研究や教育」は、どのくらい先の未来を意識して来たのだろうか？また今の私はどの程度の未来を見据えて研究や教育を行っていくべきなのか、と自問する機会ともなりました。皆さんは今、いつ頃の未来を見据えて研究・教育などされているのでしょうか？機会があれば（お酒を飲みながらでも）いろいろな方のお考えを聞いてみたいものです。ここでは、日本の計量生物学がより発展していくために、将来を担う人材養成と、生物統計家の活動の場を広げるという点で、計量生物学と外との関係に関して、現在の私自身が取り組みたいと考えていることを書いてみたいと思います。

私が日本計量生物学会に入会したのは10年ほど前になります。それまでは学生時代から一貫して数学のフィールドの中で数理統計学の学習、研究などを行ってきていました。私自身があまり外を見なかったこともありますが、少なくとも学部・大学院を通して、その当時生物統計学に触れる機会はありませんでした。医学分野で統計学が使われるということは何となく話としては聞いていたものの、医学統計などという言葉を知ると、医学の知識が無い者にとって立ち入れない分野というような印象さえ感じていました。その後、生物統計に限らず、実践的な統計学の研究に興味が出てきて、幸い国立保健医療科学院でのポジションを得ることができ、丹後俊郎先生のもとで生物統計分野の一員として研究・教育を開始するに至りました。科学院では研究スタッフの大部分は医療分野の専門家であり、また厚生労働省の研究・教育機関として公衆衛生に携わる現場の医師・看護師の方を対象とした研修も実施しています。着任間もない私もいくつかの科目を担当したり、疫学の先生方との議論に参加したりすることになりました。当然何も知らない私でしたが、一方で周囲は私のことを（生物）統計学の専門家と見て質問や議論をされてきました。その度に必死に教科書的なものを含めた何冊もの本などを調べ、また身近にいらした丹後俊郎先生、山岡和枝先生にもいろいろ教えていただいたり助けていただいたりしながら、自分自身が勉強しながら教育・研究を行っていました。

こういった私の経歴は、他分野に突然出て行った異端児だとみられることがあります。しかし本学会会員の方の中にも多くの数理出身の方がいらっしゃいます。ここ数年、私の出身大学で理工系大学院生を対象に、現在の私の研究などを紹介する講義なども担当してきました。そこでも数学出身の私が医学分野で研究を行っているということに数学専攻以外の学生からも大変驚かれますが、同時に他分野へ進んで研究を行う可能性を認識し、興味をもつ学生も多くいます。私としては、生物統計学に関わっていない学生にも、その進路として生物統計分野へ進むことが一つのルートとして広く認識してもらうこと

ができれば、より多くの人材が集まってくるようになるのではないかと考えています。もちろん即戦力ではないかもしれませんが、生物統計学の専門的な教育と併せて、他分野の学生が異端児と感ずることなく、生物統計の大学院や研究職に進むことが普通の選択肢のひとつとして考えられるような環境を作ることが重要だと思います。

そのためには、いま計量生物学に関わる私たちが、これまで以上に積極的に他分野に普及活動を行ったり、実際出向いて教育を行ったりすることも必要かもしれません。それとともに、我々自身も他分野へ進出して研究や連携を進めていくことも重要だと思います。これまで多くの先生方のご活躍のおかげで、臨床試験をはじめ多くの分野で生物統計家の重要性が認識されるようになってきています。一方で私自身が相談を受ける疫学・公衆衛生などの分野でも、まだまだ統計の重要性や統計専門家の必要性を感じられていない分野や、要望はあるものの連携がうまくいっていないと感ずることがあります。新しいフィールドで仕事をするには、私たちにしてもそれなりの覚悟と、労力もかかります。しかしその結果、相手の分野での貢献はもちろん、生物統計の重要性や有益性、必要性を認識してもらうことができると感ずます。その連携の糸口が出来れば、次の生物統計家の新たなフィールドにつながることになると感ずます。またその実績を学生教育の中で紹介することで「生物統計学は面白い」「役立つ」と興味をもってもらえれば、前述のように新たな人材をさらに集められる効果も出てくるのではないかと考えています。多くの人材と幅広い活躍の場が得られることが、結果的に計量生物学を盛り上げていく力になるのではないかと感ずます。

もちろんこれまでの本シリーズの執筆者の方々が書かれているように、他にも様々な考えるべきこと、課題があると思ずます。また実際に全体として目に見えるような形が作られるには、やはり5年10年などの期間がかかるでしょうか。しかしその程度の中期的な未来において日本の計量生物学が更に発展していることを目指して、私自身、目の前の短期的課題の1つ1つに対して積極的に行動していかねばならないと、今回の原稿を書きながら改めて考える機会となりました。